

ふるさと米子 探検隊

第2号 米子城 入門の巻 2005年2月18日



編／発行 米子市立図書館

TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637

<http://lib.yonago-city.jp/lib/>

米子城探検について

米子の町は米子城を中心にして発達してきた町です。こういった町のことを城下町といいます。米子の城は、今から540年ほど前の1467年に応仁の乱が始まり、各地で武士による戦乱の世が始まったころ、飯山に砦が築かれたのが始まりです。

その後、今の湊山に二つの天守がつくられ、湊山を中心にして内堀と外堀が掘られました。内堀と外堀の間には侍の屋敷が、外堀の外側には町人の町がつけられました。また寺が集められて一つの町がつけられるなど、武士による町づくりがすすめられました。

天守や城主の館、米蔵などの建物や内堀・外堀なども今はもう残っていませんが、城山に登ってみると、石垣や門の跡を見ることができます。それだけではなく、米子の町には、城に関係する多くのものを見つけることができます。

米子城を探検することで、なぜお城が壊されたのか考えてみたり、町中に残っている江戸時代に関わるものを発見したり、米子の町並みや成り立ちについて調べてみましょう。

探検隊の参考資料

図書館には、みんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。

- ・「新修 米子市史 第12巻(絵図・地図 資料編)」米子市史編さん協議会／編
米子市 1997 Y224/Y19
 - ・「新修 米子市史 第2巻(通史編 近世)」米子市史編さん協議会／編 米子市
2004 Y224/Y19
 - ・「米子城絵図面 (米子城資料第1集 3版)」米子市立山陰歴史館／編・刊 2001
Y52/Y4
 - ・「伯耆米子城」佐々木 謙／著 立花書院 2000 Y224/S1-5
 - ・「山陰の城」相賀徹夫／編 小学館 1981 Y52/O3
 - ・「山陰歴史館ブックレット1巻～8巻」山陰歴史館 1994 Y224/S9
 - ・「米子城跡」第38次調査 米子市教育文化事業団／編・刊 2003 Y224/Y5
 - ・「米子城のお話 (紙芝居)」檀田春紀・後藤俊夫／著 米子市立図書館 1994 Ck#
- (資料名の後の数字と記号は「請求記号」です(ラベルの番号)。資料の配列場所を示しています。図書館にはこの他にもたくさんの資料があります。)

米子城の年表

1467年 (応仁元)	応仁の乱始まる 山名氏が飯山に砦を築く
1524年 (大永4)	広瀬の尼子経久が米子城(飯山砦)をはじめ伯耆の城を攻め落とす (大永の五月崩れ)
1566年 (永禄9)	毛利氏、山陰に進出 尼子氏の月山が落城する 米子城は毛利方の武将 福頼元秀が守る
1571年 (元亀2)	尼子方の羽倉孫兵衛が米子の城を攻め、城下の民家を焼き払う
1587年 (天正15)	このころ八幡新兵衛が皆生を開拓する
1591年 (天正19)	吉川広家 東出雲・隠岐・西伯耆の領主となり 湊山の築城工事を始める
1600年 (慶長5)	関が原の戦いの後、吉川広家は岩国(今の山口県)に移され、代わりに駿河(今の静岡県)府中城主・中村忠一が伯耆の領主となる
1601年 (慶長6)	中村忠一(一忠) 駿河より米子に来て、米子城を完成させる
1603年 (慶長8)	横田内膳が暗殺される(米子城騒動) 徳川家康によって江戸幕府が開かれる(江戸時代の始まり)
1609年 (慶長14)	中村忠一が急死 中村家断絶
1610年 (慶長15)	加藤貞泰が美濃黒野(今の岐阜県)より来て、米子城主となる
1616年 (元禄2)	のちに有名な儒学者になる中江藤樹 米子で成長する
1617年 (元和3)	国替により、池田光政が因幡・伯耆の藩主となり、米子城は家老・池田由成が城主となる 加藤貞泰は、大洲(今の愛媛県)に移る
1632年 (寛永9)	国替により、岡山藩主 池田光仲が鳥取藩主となり、池田光政が岡山藩主となる 米子城は、光仲の家老・荒尾成利が預かり、米子は以後 荒尾氏が治めるようになる(自分手政治の始まり)
1635年 (寛永12)	このころ、上福原が開拓される
1676年 (延宝4)	このころから1708年(宝永5)ころにかけて、和田・夜見・富益などが開拓される
1697年 (元禄10)	強風のため、四重櫓(副天守)が傾く
1700年 (元禄13)	このころから四期、約60年にわたり、米川の工事が始まる
1701年 (元禄14)	洪水のため、日野川が、現在の場所を流れるようになる
1708年 (宝永5)	米子城下 大火
1739年 (元文4)	因幡・伯耆 両国に百姓一揆が起こる(元文の百姓一揆)
1759年 (宝暦9)	米川が境港まで開通する
1812年 (文化9)	12月 2メートルを越す大雪 中海が凍り安来まで歩いて行けたという
1836年 (天保7)	1836年(天保7)の大飢饉
1852年 (嘉永5)	米子の豪商鹿島家の負担で四重櫓の改築始まる
1868年 (明治元)	江戸時代が終わり、明治が始まる
1869年 (明治2)	自分手政治の廃止 断髪令で“ちょんまげ”がなくなる
1880年 (明治13)	このころ米子城が壊される

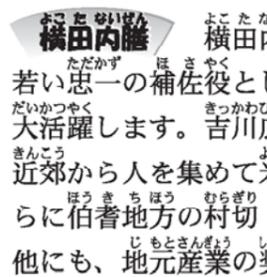


米子城のおもな登場人物

吉川広家 祖父は戦国時代の英雄の一人、毛利元就。父の元春は山陰を舞台に尼子氏と闘った武将。広家は1591年(天正19)、豊臣秀吉から出雲東部と隠岐、伯耆西部の領主に任命され、広瀬の月山城(富田城)に入ります。しかしこれからは海に面した米子が有利と考えて、この年から米子の湊山を中心に城作りを始めます。関が原の戦いの結果、吉川氏は岩国(今の山口県)に移されました。



中村忠一 一忠ははじめの名前で、元服(昔の男子の成人の儀式)の時、將軍徳川秀忠から「忠」の一字をさずかり、忠一と改めます。忠一は、豊臣秀吉の重臣であった中村一氏の子。中村氏は関が原の戦いで家康側(東軍)で戦い、その戦功により、忠一が伯耆18万石を与えられます。1601年(慶長6)、米子にやって来た時は、まだ12歳でした。しかし忠一は1609年(慶長14)に急死してしまい、中村家は断絶します。祇園町の感応寺には、中村忠一の木造坐像があります。



横田内膳 横田内膳は、最初は中村一氏に仕えた武将で、一氏亡き後、年若い忠一の補佐役として米子にやって来ました。内膳は、中村氏の家老として大活躍します。吉川広家の時代に始まった米子城の工事を完成させ、また米子近郊から人を集めて米子の町割(出身地ごとに町を決める)を決めました。さらに伯耆地方の村切(村の境界を定める)をして、検地を実行しました。この他にも、地元産業の奨励やら、道路・川の整備など、その後の米子の町の性格を決めるような大仕事をすすめています。しかし内膳の大活躍もわずか3年で終わります。1603年(慶長8)、内膳の活躍を快く思わない人々によって暗殺されます。多くの犠牲者を出したこの事件は、米子城騒動と呼ばれています。



加藤貞泰 加藤貞泰は、中村忠一の後、1610年(慶長15)から1617年(元和3)まで、8年間の米子城主です。貞泰は池田光政が鳥取藩藩主になった時、大洲(今の愛媛県)に移ります。のちに有名な儒学者となる中江藤樹は、祖父が貞泰に仕えていたことから、一時米子で暮らしました。

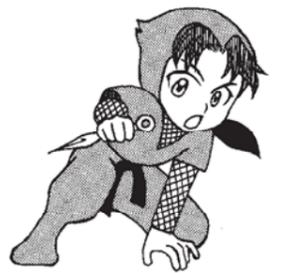
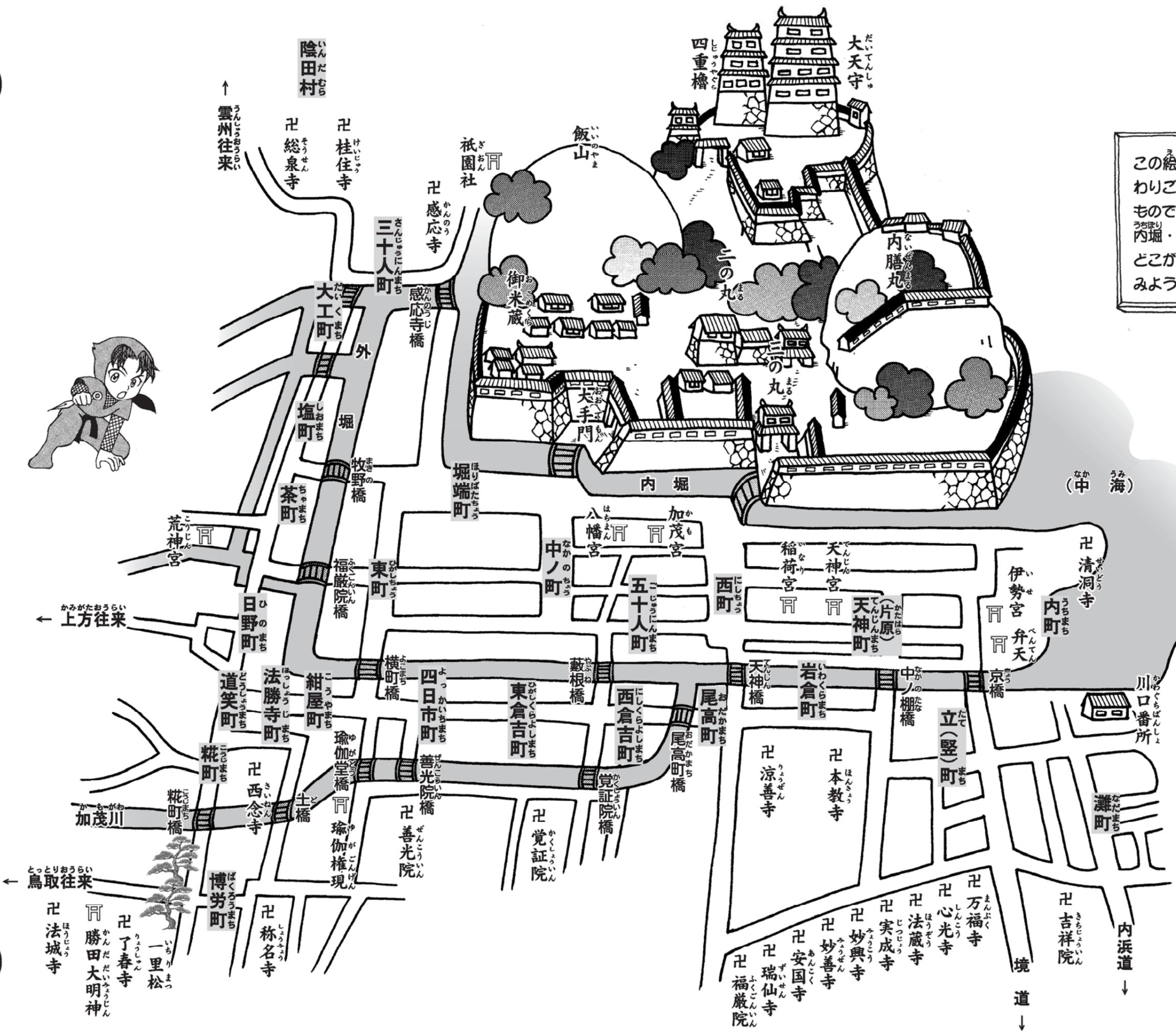
荒尾氏と自分手政治 1632年(寛永9)、国替のために鳥取藩主だった池田光政が岡山藩主に代わり、当時3歳だった池田光仲が鳥取藩主となります。それから12代238年にわたって、鳥取・池田氏が因幡・伯耆を治めました。米子城は、家老・荒尾成利の預かりとなり、米子城下は鳥取藩藩士と荒尾氏の家臣団が行政を担当しました。これは自分手政治と呼ばれ、江戸時代の終わりまで続きました。荒尾氏は米子の殿様と呼ばれ、歴代のお墓は、博労町の了春寺にあります。



南

西

この絵図面は、江戸時代の終わりごろの米子の町を描いたものです。いまと違う町名や、内堀・外堀もあります。どこが、いまと違うか調べてみよう！



上方往来

鳥取往来

東

北

(中海)

境道 ↓

内浜道 ↓

城内の探検案内

米子城は江戸時代の大部分、鳥取・池田氏の支城でしたが、一國一城令（領内の城は一つに限るといふ徳川幕府の命令）が出た後も、例外的に残されました。広い城内には、湊山(90m)・丸山(52m)・飯山(59m)の三つの拠点を持ち、二つの天守に多くの櫓や門などがありました。城全体の大きさは鳥取城よりも大きく、山陰でも有数の規模のりっぱなものでした。中世の時代の戦うための山城から、戦国時代の終わりごろには町作り全体を視野に入れた平山城・平城と、城作りも変化していますが、米子城は典型的な平山城といわれています。明治になって米子城は悲しい最期を迎えます。天守閣などは米子の商人に売られ、明治13年ころまでには全て解体されてしまいました。

飯山砦

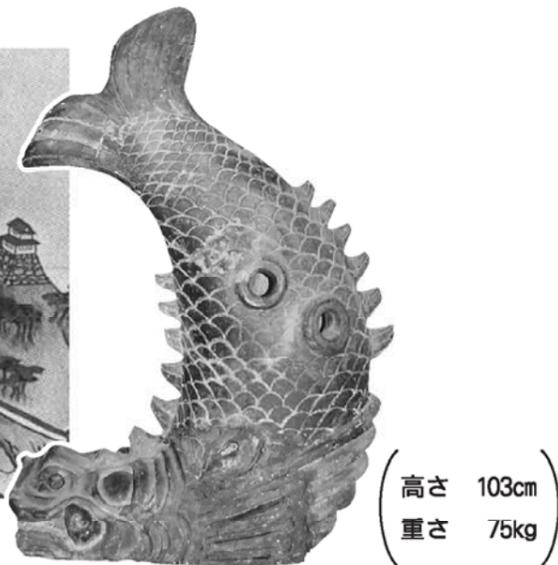
吉川広家が湊山にお城を築くまで、飯山の砦が米子城と呼ばれました。戦国時代を通して、激しい戦いが繰り返された砦でもありました。中村忠一の時代、野一色采女の屋敷があったことから采女丸とも呼ばれました。米子城騒動の時、内膳に味方する側がたてこもったため、火がかけられて焼失し、それからは使われなくなりました。

本丸と二つの天守

城内で中心となる曲輪（石垣などで囲んだ土地のこと）を本丸といいます。米子城の大きな特徴は、吉川氏の時代の三重四階の四重櫓（副天守）と、中村氏の時代に建てられた四重五階の大天守の、二つの天守閣を持っていたことでした（同じところに建てられたという説もあります）。江戸時代に書かれた絵図から、城の形と大きさを知ることができます。それによると、大天守は20m、四重櫓は16mもありました。明治に入って城が壊された時、天守の床下から、ろう城（城に立てこもって戦うこと）用の食料と思われるものがたくさん出て来ました。俵に入った塩・ビンに入った梅干・魚の塩漬け・あらめ（海藻）などです。四重櫓の大屋根の上ののっていた「しゃちほこ（鯨瓦）」が、山陰歴史館と義方小学校、鹿島家に残っています。水にすむといわれた鯨は、火除けのまじないとして、昔の城郭の屋根を飾りました。山陰歴史館には天守の階段も残っています。



文久3年（1863）米子城絵図と山陰歴史館のしゃちほこ



高さ 103cm
重さ 75kg

枳形

国道9号線沿いの西部医師会館のところから、米子城の二の丸に入ります。二の丸は、本丸を守るための、二番目の場所という意味です。入り口には東西25m、南北22mの石垣の囲いがあります。ここが枳形です。城兵の集合場所でもありました。



枳形

二の丸

枳形から階段を登ったところに旧小原家長屋門があります。これは荒尾氏の家臣であった小原家のものを移したものです。ここを入ったところにあるテニスコートの場所が二の丸で、城主の住む館があったところでした。普段は鳥取にいた荒尾氏が米子にきた時はここを使いました。



旧小原家長屋門

内膳丸

テニスコートの奥側の石段を登り、本丸への道を途中で右に曲ると、南北に長く作られた曲輪があります。本丸の守りをかためるこの曲輪は、横田内膳が監督して作ったので内膳丸と呼ばれたという説があります。火薬庫などもここにありました。このあたりはもとは丸山といわれました。

三の丸

三の丸は、城郭のなかでも一番ひろい場所です。飯山のふもとの全日空ホテルのあたりから、湊山球場、鳥大医学部病院の敷地までを含んでいました。お城の正面入口にあたる大手門は、今の国道9号線の道路あたりにありました。三の丸には、米蔵、厩、作事小屋など多くの建物がありました。

内堀と外堀

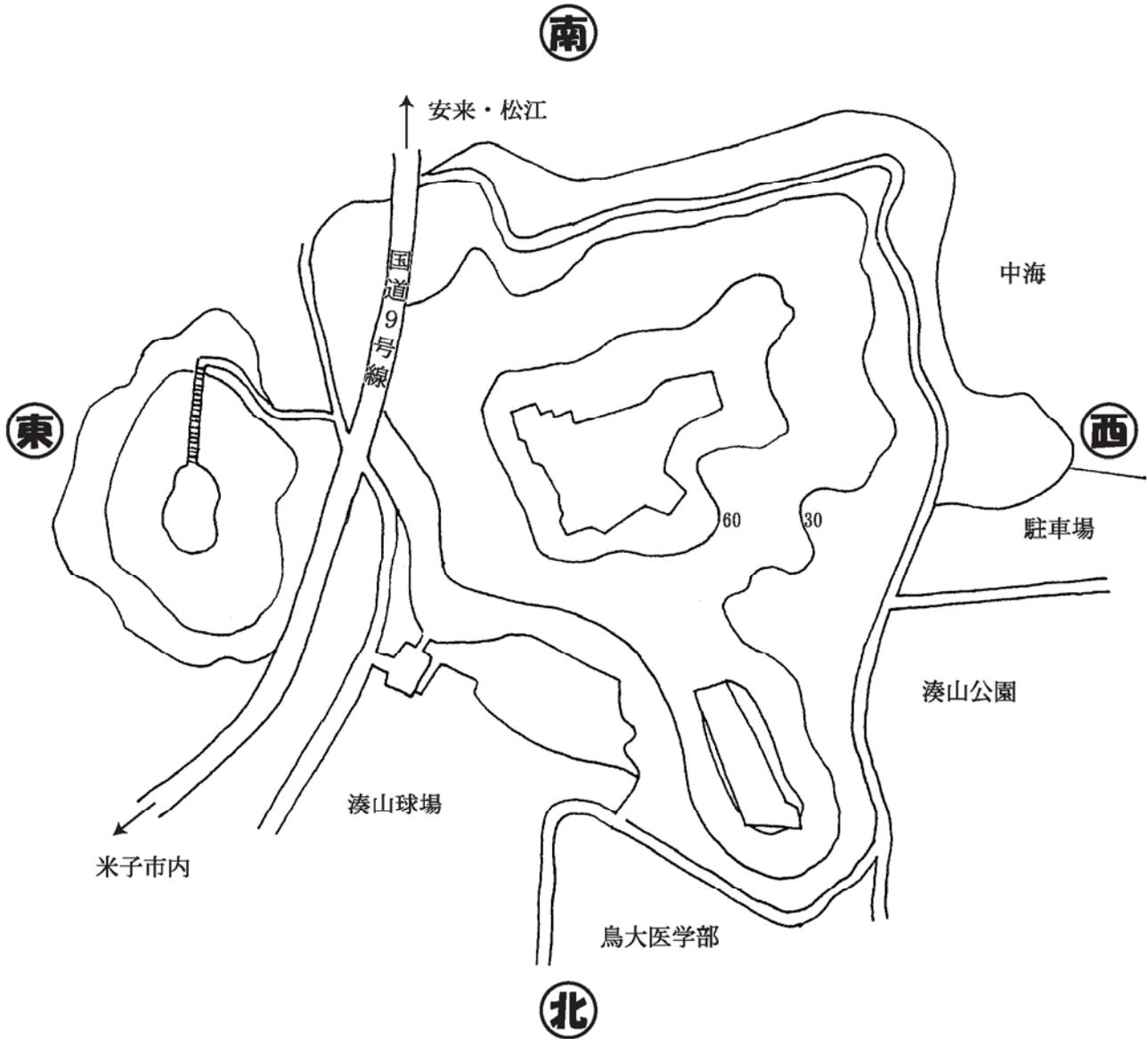
堀は敵から城を守るためのものです。米子城は内堀と外堀の二重の堀を持っていました。内堀は深浦（今の久米町の新加茂川）祇園橋のところから、飯山カントリーの横を抜け、東町公園のところまで西側にまがり、湊山球場の東側を通り、鳥大医学部病院の敷地内で、中海にそそいでいました。外堀は新加茂川橋の西側から、大工町・塩町・茶町・日野町の裏をながれ、法勝寺町のあたりまで西側にまがり、西倉吉町で加茂川橋と合流していました。内堀と外堀の間は侍屋敷が並び、町は「ちょう」と呼ばれ、町人の住む外堀の外側は「まち」と呼ばれ、区別されていました。「まち」と「ちょう」は7つの橋で結ばれていました。

中海の守り

米子城のある湊山を、新加茂川側におりたところは深浦と呼ばれ、元YSPの建物があったあたりに御船手の曲輪がありました。御船手とは、水軍のことで、海からの防衛陣地であったばかりでなく、中海で船の遭難があった時なども活躍しました。加茂川河口にあった川口番所と仕事を分担していました。

探検の記録を付けよう!

これは、現在の城山の白地図です。この地図のなかに自分が歩いた道、発見したものを書き入れてみましょう。櫓、門、番所、米蔵など、自分で調べて場所と形を確かめてみましょう。ヒントの名前は、地図の下にあります。



だいてんしゅ 大天守	しじゅうやぐら 四重櫓	ないぜんまる 内膳丸	いいのやまとりで 飯山砦
おおてもん 大手門	たいこごもん 太鼓御門	ふかうらばんしよ 深浦番所	ますがな 枳形
にまる 二の丸	さんまる 三の丸	こめぐら 米蔵	かやくこ 火薬庫
			さくじこや 作事小屋



(イラストは難波康子さん)